（2）電話、文章（e-mail、ＦＡＸ）での取材対応

1）電話での取材対応

①そのまま電話対応をしてもよい場合
　次のような要請については、そのまま電話で対応してもかまいません。
◇既発表資料の送付依頼。
◇既発表事項やデータの提供依頼。
◇回答方法があらかじめ決められた話題について。

②電話対応の心得
　電話対応では次のような点に気をつけましょう。
◇5W1Hを確実に聞きメモをとる。
・落ち着いて、正しく、丁寧に記録することを心がける
・日時や数字、人の名前など特に大切な事柄は、話が終わった時点で復唱し再確認をする
◇誤解を避ける。
・電話で回答するだけでなく、リリースや、資料となっているものは、できるかぎりe-MailやFAXで送り、誤解を避けるようにする
◇記録をとる。
・聞かれた内容は必ず記録しておく
・場合によっては録音する
◇電話のマナーも重要。
・かけた方が先に切るのが電話のマナー。先方が切ったのを確かめてから電話を切る

③いったん回答を保留して、折り返す場合
　次のような要請に対しては、いったん電話での回答を保留して、提供情報の検討、情報内容の整理などを行った上で、折り返し電話などで連絡するようにしましょう。
◇既公表データではない内容。
◇手元に資料がない場合。
◇すでに発表された内容ではあるが、込み入った話題である場合。

2）文章（e-mail、ＦＡＸ）での取材対応－基本的に記者クラブ外メディア－

①e-Mail、FAXの特徴

最初から文字になっているe-Mail・FAXは即効性があるため、締め切り時間に追われるメディア記者への対応には効果的です。

②取材対応時に求められる文章とは

広報で必要なのは名文ではなく「正確」な文章です。資料が正確で事実関係がはっきりしていることが重要なポイントになります。

5W1Hの法則にのっとり、簡潔で分かりやすい文章を作成し、e-Mail・FAXで送付するようにしましょう。

③文章での対応の留意点

すでにリリースやプレスキットになっているものを、できるだけ送るようにします。

FAXは共有使用になっていることが多く、送った後に埋もれてしまう可能性があります。また、通信ミスや間違った番号に送ってしまうこともあるため、送付後にe-Mailや電話で確認しておきましょう。

（3）記者と面会しての取材対応

1）単独での取材対応－直接席への訪問を受けた場合－

①対応の心得

記者の取材に対応する場合には、次のようなことに気をつけてください。

◇単独で対応する場合は、責任が一人に集中することを忘れない。

◇既に公表されている内容や、専門セクションの担当者によってメディアに対して明らかにされている内容について、事前に整理しておく。基本的にはこれ以上の内容は話さない。

②対応の手順

記者の取材への対応に際しては、次の点に留意しましょう。

◇原則として録音はしない。

・よほど込み入った話題でない限り録音はしない

◇憶測や推測で回答しない。

・分からない点は憶測等で回答しない。

・しっかりと記録しておき、後に担当者に確認するなどして正確な情報を伝える

◇こちらからの質問する。

・チャンスがあれば積極的に質問し、情報収集・意見交換に努める

◇事前の工夫も必要。

・好意的でなく、長居が予測される取材の場合、取材予定時刻が過ぎたところで、あらかじめメモを入れてもらうようにしておくなどの工夫。

③対応後の記者へのフォロー

記者から取材を受けた後も、適切なフォローを行うことによって、より適切で正確な情報発信につながるような配慮が必要となる。

◇取材終了後、必要に応じて記者にフォローの説明や、追加の資料提供をする。

◇その場の状況を見ながら、可能であれば記者に評価・感想等を聞いておく。

◇可能であれば、いつ記事になるのか、何時のニュースで放送するのかを確認し、その内容をチェックする。

2）通常の場所以外での取材対応

職場のデスクや庁舎の廊下など、通常の場所以外で取材を受ける場合には、次のような点に気をつけましょう。

◇あらかじめ立入禁止地域や、撮影禁止ポイントについて説明しておく。
◇立入禁止や撮影禁止ポイントを設定する時は、なぜ禁止なのか説明できることが条件となる。
◇被取材者の品位や行政の品格・信頼感を落とすような備品等がないか、あらかじめチェックし撮影に備える。
◇部外秘の資料等が外に出ていないかチェックする。
◇取材が入る場所で勤務する職員には、あらかじめ知らせて了承をもらう。

（4）その他の形式での取材対応

1）夜討ち朝駆けへの対応

「夜討ち朝駆け」は「夜回り」ともいいます。取材のキーとなる人物の自宅へ、記者が直接取材に行く行為のことです。このような取材を受けた場合には、次の点に注意しましょう。
◇無下に追い返すことはせず、一通りの対応はする。
◇しかし、その場での“取材”は受けない。
◇「取材については庁舎でお受けしますので、○○へご連絡ください」と伝えるようにする。

2）複数の記者への取材対応

直接やりとりをしている記者以外の目があることを忘れないように気をつけましょう。
◇人数に合わせた取材対応場所の準備やスケジュール配分など、参加した記者全員に満足してもらうための心配りが必要。
◇人数が多くなればなるほど資料の準備を怠りなく。
◇質問に対しては質問者に目線を合わせ、誠意を持って答えるのが基本。ただし、他の記者も聞いていることを忘れずに。
◇質問記者が一人に偏りすぎている場合、他の記者からも意見がないか、タイミングを見て嫌味にならないように聞き、バランス良く進行させる。
◇困った質問ほど、それに答える態度を観察するのが記者の特性。

3）囲み取材への対応

突然の取材にもあわてずに対応しましょう。
◇記者に突然囲まれて質問、意見を求められた場合、公表事項であれば、落ち着いて正確に答える。
◇テレビカメラが待ちかまえている場合もある。悪いイメージで伝わらないように、常に言動には注意して記者に対応する。
◇公表事項ではなかったり、分からない場合は、はっきりとその旨を伝え、推測では答えない。説明できるようになる時期が分かる場合は、そのことを伝える。
◇その場にはないが、質問に答えるための提出可能な資料があれば、質問者の社名、名前、連絡先を聞き(名刺をいただく)、できるだけ早急に届けることを伝える。電話などでフォローの回答が可能な場合は、追って電話連絡する旨も伝える。

（5）プレス発表

1）プレス発表の準備

①プレス発表の基本形態～司会を立てることでスムーズな進行を～
プレス発表の基本的な形には次のようなものがあります
◇「プレス発表者1名+司会」の場合。
・プレス発表者1名がリリースを読み上げながら基本説明をし、すべての質問に対して回答する。
・司会者は会を進行させるとともに、質疑応答時に質問者を指名する。
◇「プレス発表者1名+サブ発表者+司会」の場合。
・メインのプレス発表者がリリースを読み上げながら基本説明をし、それだけでは不十分な場合、専門分野のサブ発表者が補足説明する。それによって、あらゆる質問に対し専門的見地から即答できるようにする。

②プレス発表者の人選～責任者・状況の把握者が対応～
プレス発表者の人選に際しては、次のような点に留意しましょう。
◇当該事案に対して明確な役割・責任を持つ人をプレス発表者に。
◇人数は最低限で。
◇多くを把握し、責任を持って発言できる地位にある人が発表者として適任。
◇記者からの厳しい矢継ぎ早の質問に対して、冷静に振舞い回答していく必要があるため、あまりに対応が不得手の人を発表者にすることは避ける。
◇同じテーマ(問題・事故)に関しては、同一人物がプレス発表者・司会者として立つ方がよい。

③会場の設定・設営～緊張感を高めない工夫を～
プレス発表の会場については、次のような点に留意しましょう。
◇狭い会場の場合、発表者と記者の距離が詰まり、熱気に包まれやすくなると同時に不必要に緊張感を高めてしまうので、できるだけ広い会場を確保する(想定の1.5倍以上は確保するのが望ましい)。
◇スクール形式の配置に。
◇テレビカメラ設置用に、会場後方は広く開ける。
◇テレビカメラが回り込まないように、プレス発表者の後ろにはスペースを作らない。
◇プレス発表者と記者の出入り口は、できれば別にする。
◇過剰な熱気を避けるため、室温は通常よりも低めに設定する。
◇記者向けに飲み物を用意する(緊張感を和らげる効果をもつ)。

2）司会者・進行役

①司会者の役割～第三者的立場を貫く～
司会者は、次のような点に留意しながらプレス発表を進行させます。
◇司会者は第三者的立場で進行し、質疑応答を仕切る。
◇発表の時間は厳守する(入室10秒前、定刻着席)
◇司会者がプレス発表者を誘導する。
◇開会を伝え、プレス発表者を紹介する。
◇発表を進める。
◇発表を終了し、質疑応答へ誘導する。
◇質問者を指し、質問を聞いてから回答者を指名する。
◇挙手多数の場合は会場をよく見て、先に手を挙げている記者から指す。
◇全体の雰囲気を見て、終了のタイミングを見極めて質問を終了させる。

②発表の基本的な進行
プレス発表の全体的な流れは次のようになります。
◇受付→登壇者着席・記者入室→開始→資料配付・発表→質疑応答→終了→退室。

3）プレス発表時の留意点

①説明時の留意点～マスコミ記者の視点に立った説明～
当該事象を説明する際には、マスコミ記者の視点に立った説明をするようにしましょう。
◇マスコミ記者に事実を正確に把握してもらい、広く市民によりよく伝えていただきたいという姿勢で説明を行なう。
◇事実に基づいて話し、決して嘘や隠し事をしない。
◇明瞭・明確・丁寧に説明する。
◇通常よりワンテンポゆっくりと話す。
◇品格を保ち穏やかで謙虚に説明する。

②質疑応答時の留意点
質疑応答は真剣なやり取りになります。紛らわしい発言、専門用語の多用、感情的な対応は慎みましょう。
◇一人ひとりの記者に誠意を持って接する(記者の後ろには多数の読者・視聴者がいる)。
◇質問した記者の目を見て答える。
◇質問は最後まで聞く(質問が多岐にわたる場合にはメモをとる)
◇質問事項が多かったり、質問内容が理解しづらい場合には確認してから答える。
◇記者の質問を良く聞き、内容だけでなく意図していることも考えながら聞く。
◇挑発する質問者に乗らないように、感情的にならず冷静に対応する。
◇誘導尋問には乗らない。
◇オフレコ発言はしない。
◇業界用語、専門用語は極力使わない。
◇傍観者的な立場の発言や態度は極力避ける。
◇予測、推測による発言をしない。
◇即答できない質問に関しては、その理由をはっきり伝える。
・分からないことは分からないと答える勇気を。後で調べてから連絡する。
・調査中であれば、発表できるタイミングの目安を伝える。
◇誤解に対しては明確に訂正し、正しい事を説明する。
◇プレス発表での発言は、後で否定できないことを肝に銘じておく。

③動作・表情・服装などに関する留意点
記者の前に立つ場合には「見た目」にも十分な配慮をしましょう。
◇いつでもカメラが追っていることを意識する。
◇定時に着席する。
◇動揺すると紙を持つ手が震えかねないので、報道用資料は机上に置く。
◇マイクとの的確な距離を確認しておく。
◇なるべくハンカチで汗は拭わない(動揺していると捉えられる可能性も)。
◇無意味に笑顔は作らない(不真面目と捉えられる)。
◇できるだけ無用な動作はしない。
◇深く腰をかけ正しい姿勢を心がける(足を組まない)。
◇派手な服装、華美な装飾品は慎む。
◇頭髪のみだれ、眼鏡の汚れなどを事前にチェックする。

④【参考】記者魂に火を付けてしまう言葉

リスクコミュニケーション（仮題）

構成台本

約２５分

株式会社電通パブリックリレーションズ

２００７年4月１７日

登場人物

小川：県庁健康政策課感染症係係長

渡邊：毎朝新聞社会部記者

田中武彦：新型インフルエンザ感染者

斉藤：毎朝新聞山川支局長

森田：山川市立病院医師

吉田：山川市立病院看護師

職員１：県庁健康政策課感染症係職員

職員２：県庁健康政策課感染症係職員

記者Ａ

記者Ｂ

記者Ｃ

入院患者

宮本：山川市立病院の若い看護師

その他報道陣

女性キャスター：Ｃと表記

ナレーター：Ｎと表記

映　　像	音　　声
【プロローグ】 ①増殖するＨ５Ｎ１ウイルスの顕微鏡映像。（要資料提供）	ＢＧＭ♪不安感 Ｎ「数日前から、東南アジアＡ国の国立感染症病院にＨ５Ｎ１型、いわゆる鳥インフルエンザと思われる重篤なインフルエンザ様疾患の患者が来院し続けていた。 　高熱と、咳による呼吸器疾患に加え、下痢を訴える同様の来院者数はすでに１０名を超え、同院は半ばパニック状態に陥っていた」
②現地法人でのミーティング 田中武彦が現地法人担当者と握手している	Ｎ「１週間の出張で、現地法人との新規契約の締結を終えた日本繊維工業の田中武彦は、予定通り帰国することになった」
咳をする現地担当者と接触する田中	Ｎ「田中は、交渉中の現地法人担当者の発熱と咳を気遣う場面はあったものの、さして気に留めることはなかった」
③新聞の見出し風にテロップが飛び込む	Ｎ「Ａ国の国立感染症病院の依頼で、国立衛生微生物研究所が行なった検査の結果、５名のＨ５Ｎ１陽性患者が確認され、感染の拡大の可能性と死者の発生が、国際通信社によるスクープとして、センセーショナルに報道された」
④機内 咳と発熱を感じる田中	Ｎ「しかし、Ａ国から日本に向かう航空機内の田中は、その事実を知らなかった」 田中「コホン…ゴホン」
【メインタイトル】 リスクコミュニケーション	ＢＧＭ♪アタック

【スタジオ】 女性キャスター登場	C「これから皆さんにご覧いただくビデオは、情報化社会の中にあって、マスメディアへの対応がいかに重要であるかを再認識していただくためのものです。 プロローグでもお分かりのように、このビデオでは、東南アジアA国でH５N１に感染したと思われる日本人が帰国したことによって起こる状況を想定し、マスメディアに対してどのように対応すれば、適切な情報提供が行えるかを検証します」
【成田空港】 検疫所を通過する田中たち 到着ロビーを辛そうに歩く田中	N「田中は、自分の体内で起こっている変化を軽視し、申告もせず検疫所を通過し…」
【走る新幹線】	N「成田エキスプレスを東京駅で乗り換え、新幹線と在来線を乗り継ぎ、山川市の自宅に帰宅した」
【救急車～救急病院】 発熱と呼吸困難に苦しむ田中 赤色灯が回転する 救急病院の救命救急センター 迅速診断キットによる検査 医師・看護師の慌しさ 個室に隔離される田中	N「帰宅後、３８℃を越える発熱と酷い呼吸困難に陥った田中は、家族が呼んだ救急車で市内の救急病院に運ばれ、そのまま入院した。 入院時の迅速診断キットで、インフルエンザA型が判明し、インフルエンザH５N１陽性の恐れがあることから、ただちに４人部屋から個室に隔離された」
その様子を見ていた４人部屋の入院患者の一人が公衆電話コーナーに向かう 電話帳を見ながら電話する	患者「もしもし、毎朝新聞さんですか…」

【毎朝新聞山川支局】 支局長の斉藤が電話をかける	斉藤「渡邊君、斉藤だが、私立病院に入院中の患者から、なにやら変な病気の患者がいて、病院の中が騒ぎになっているという情報提供があったんだ」
【街角】 携帯電話で話している渡邊 （以下、２画面構成で渡邊と斉藤のやり取り）	渡邊「変な病気ですか？まさか、東南アジアで騒ぎになっている例のやつじゃないでしょうね…」 斉藤「タレコミによると、その患者は４人部屋から個室に移されたらしいんだが、その病棟の一部が通行禁止になっているそうだ」 渡邊「隔離ってことですか？！」 斉藤「そうなんだ。とにかく、至急裏を取ってくれ！」 渡邊「了解！すぐ市立病院に向かいます」
【山川市立病院外景】	
【山川市立病院医局】 森田医師がＤ県庁感染症係の小川に電話している	森田「はい、患者は先程個室に隔離しました。高熱と呼吸困難が継続している状況なので、念のため病棟の一部は通行禁止にしてあります」
【Ｄ県庁外観】 健康政策課感染症係のプレート デスクで電話に出ている小川	小川「分かりました。患者が東南アジアからの帰国者ということだと、Ｈ５感染の可能性もありますから、至急県の衛生研究所に検査を依頼します。 結果が出るまでは、隔離したまま経過観察を続けてください」
【山川市立病院医局】	森田「はい、分かりました。検査結果は、何時頃になりますか？」

【健康政策課感染症係】	小川「小１時間で分かると思います。 　それでは、何か状況に変化があったら、こちらに至急連絡してください」
【山川市立病院医局】 森田が電話を切ると同時に看護師の吉田が飛び込んでくる	森田「はい、変化があったら連絡します。それではまた後ほど…」 吉田「先生、毎朝新聞の渡邊さんという方が取材にお見えですけど」 森田「毎朝新聞？！今は、それどころじゃないから、帰ってもらって」 吉田「私からもそう言ったんですけど、帰ってくれないんです」
【山川市立病院廊下】 医局のドアから森田が出てくるのを見つけ、渡邊が駆け寄ってくる	渡邊「森田先生！いったいどんな病気が発生しているんですか？」 森田「なんだ、渡邊君か、まだ何も言える状況じゃないから…」 渡邊「何で言えないんですか？ 　まさか、医療事故でも隠しているんじゃないでしょうね」 森田「何を言ってるんだ！医療事故なんてとんでもない、とにかく検査の結果が出るまでは…（ハッとする）」 渡邊「検査？って、何の検査なんですか？」
無言で立ち去る森田	森田「……」
【山川市立病院通用口】 出勤してきた若い看護師宮本とぶつかりそうになる渡邊	宮本「すみません、大丈夫ですか？」 渡邊「おっと、今からお仕事ですか？」 宮本「？」 渡邊「以前お世話になった渡邊です。子どもが骨折で入院した時…」 宮本「ああ…」 渡邊「宮本さんでしたよね。ちょうど良かった、ちょっと聞きたいことがあるんですけど」

【スタジオ】 女性キャスター 以下、シュミレーション映像が挿入される	C「情報というのは、ほんのわずかな隙間をぬって漏洩します。 市立病院の医師が、顔見知りの記者のひっかけ質問にのることはありませんでしたが、直接関係のない若い看護師が口を滑らせてしまいました。 人の口に戸は建てられないと言いますが、こうして流れ出た情報が一人歩きを始め、憶測を呼び、パニックを引き起こしかねないのです」
《電話による取材対応時の注意事項》	
【県庁外観】 健康政策課のプレート	ＳＥ電話のベルが鳴る
【健康政策課感染症係】 電話に出る小川	小川「はい、感染症係の小川です」
【車中】 ハンズフリーの携帯電話で話す渡邊	渡邊「小川さんですか、先日はどうも。 毎朝新聞の渡邊ですが、市立病院にウイルスによる感染症の患者が入院しているそうですが、病名は何ですか？」
【健康政策課感染症係】 電話で応対する小川	小川「（動揺しながら）え、ええ。…どこでそんな話をお聞きになったんですか？」
【車中】 携帯で電話中の渡邊	渡邊「何でも、高熱と呼吸困難の患者が入院しているそうじゃないですか。ところで、ウイルスは特定できたんですか？」

【健康政策課感染症係】 電話で応対する小川 （以下、２画面構成で渡邊と小川のやり取り）	小川「現在、検査結果の情報を確認中ですので…」 渡邊「検査は、どこに出しているのですか？」 小川「県の衛生研究所ですけど…」 渡邊「何時ごろ結果が出るんですか？」 小川「そ、それは…」 渡邊「ところで、病名の見当は付いているんですか？」 小川「……」 渡邊「もっと正確な情報を教えてくださいよ。我々には、県民に、いや国民に報せる義務があるんですから」 小川「だ、だから、まだその段階じゃないと…」 渡邊「このまま放っておいたら、噂が広がってパニックになりますよ！」 小川「……」
【スタジオ】 女性キャスター	C「電話取材は、不意にかかってきます。 このような状況下では、取材側は推測に基づいた突っ込んだ質問を投げかけてきます。 しかし、それにのせられ不用意な発言をしてはいけません。 情報があいまいな段階で、あいまいな発言をすることは慎まなくてはいけません。 また、動揺したり、言葉に詰まることで、取材相手による新たな疑惑や憶測を招きかねません。 それでは、このような状況での適切な対応事例を見てみましょう」

～適切な対応例～	
【車中】 ハンズフリーの携帯電話で話す渡邊	渡邊「毎朝新聞の渡邊と申しますが、市立病院にウイルスによる感染症の患者が入院しているようですが、病名は何ですか？」
【健康政策課感染症係】 電話で応対する小川	小川「お知りになりたいことがあれば、こちらで確認しますので、分かり次第折り返し連絡します」
【車中】 携帯で電話中の渡邊	渡邊「市立病院の森田先生に取材しましたよ。何でも、高熱と呼吸困難の患者が入院しているそうじゃないですか」
【健康政策課感染症係】 電話で応対する小川	小川「その患者に関しては、現在事実関係を確認中ですので…」
【車中】 携帯で電話中の渡邊	渡邊「もっと正確な情報を教えてくださいよ。我々には、県民に、いや国民に報せる義務があるんですから」
【健康政策課感染症係】 電話で応対する小川	小川「現在、事実関係を確認中ですので…」
【スタジオ】 女性キャスター	C「電話取材の場合は、すでに確認・公表されている以外の情報を簡単に開示してはいけません。 また、肯定とも否定とも取れるようなあいまいな表現は、取材側の憶測につながります。 今回の事例のように複雑な内容の場合、電話だけでは誤解を招く可能性がありますか

	ら、できれば直接面談によって対応することが望まれます。 　さらに注意すべき点は、取材側の憶測によるストーリーにのせられて、うっかり自らも推測や意見などを述べてしまうことです」
【街角】 携帯電話中の渡邊	渡邊「支局長、これはひょっとして東南アジアで広がっている、例の感染症じゃないでしょうか」
【毎朝新聞山川支局】 デスクの斉藤	斉藤「そうだな、新型インフルエンザの可能性が高いな…」
【街角】 電話を切り車に乗り込む渡邊	渡邊「とにかく、電話じゃ埒が明かないんで、これから県庁に行ってみます」
【急発進する渡邊の車】	
【県庁内の会議室】 担当者会議が開かれている	小川「患者がＡ国から帰国したことが明らかな以上、県民に報せる必要があるのではないでしょうか」 課員１「そんなことしたら、県民にむやみな不安を抱かせるだけじゃないですか」 小川「しかし、患者が移動中の電車内や病院で第三者に感染した可能性もあるのでは…」 課員２「まだ、新型インフルエンザと断定されたわけではないんです。 　発表するには、まだ早すぎるんじゃないですか？」 小川「そうでしょうか…」

《１対１対応の取材の注意事項》	
【健康政策課感染症係】	
デスクで考え込んでいる小川 渡邊がずかずかと入ってくる	渡邊「小川さん、市立病院の件ですが、あれは新型インフルエンザの国内第１号発生の可能性が極めて高いんじゃないですか？」 小川「情報がまだ確定していない以上、現時点で言えることはありません」 渡邊「こっちだって、ちゃんと病院関係者に取材をかけてますからね。 本当は、もう検査結果が出ているんじゃないですか？
渡邊の視線が机上の資料に注がれる 慌てて隠す小川	だから、さっき連絡会議をやっていたんじゃないんですか？」 小川「とにかく情報が確認でき次第、正式に発表しますから、それまで待っていてください」 渡邊「じゃあ、ここだけの話しにしますから、新型インフルエンザ第１号の国内患者が入院中というのは事実なのかどうか、教えてくださいよ」 小川「う、うん」
それとなくＹＥＳの感じ	渡邊「否定はしないんですね」 小川「……」
【スタジオ】	
女性キャスター	Ｃ「記者との１対１の対応での注意点を考えてみましょう。 まず第一に、メディアへの対応でオフレコということはあり得ません。 特に記者との面識があったりすると、つい気を許してしまうこともありがちです。 この段階では、あくまですでに公開されている情報のみを提供するようにします。 また、デスクの上などに不用意に資料を置くことなども慎まなければなりません。

	できる限りデスクでの取材は避け、別室で行なう配慮も必要です」
【インターネット上の情報】 毎朝新聞のネットニュース	N「結局１時間後には、毎朝新聞のインターネットニュースに、国内Ｈ５Ｎ１陽性患者発生の速報が配信された。 これを受け、マスコミ各社が県庁と厚生労働省に殺到した」
《囲み取材による対応時の注意事項》	
【県庁玄関前】 マスコミ陣に囲まれる小川 矢継ぎ早に質問が飛ぶ	記者Ａ「検査結果は出たんですか？」 記者Ｂ「患者の名前と住所は？」 記者Ａ「やはり、新型インフルエンザなんですか？」 記者Ｂ「他に、感染者はいないんですか？」 渡邊「感染症対策課として、どんな対策を打ち出すんですか？」 小川「ちょっと待ってください、詳しい情報は現在確認中ですから」 記者Ａ「いつ分かるんですか？！」 渡邊「そんなこと言ってる間に、感染が広がってしまうんじゃないですか？！」 小川「ですから、後ほど会見を開きますから」 記者Ｂ「記者会見は、何時からですか？」 渡邊「厚生労働省とは、連絡を取っているんですか？」
困惑する小川	小川「……」
【スタジオ】 女性キャスター	Ｃ「事態は思わぬ方向に進んでしまい、担当者は困惑を隠しきれません。 このような囲み取材は、突然やってきます。